



地球儀

京町銀天街協同組合

地球儀



地球儀



京町には、地球儀があつた

京町銀座

地球儀。それは、京町銀天街の昔を語る時に、必ずといって良いほど登場する、キーワードだ。正確には、京町銀天街と現在のちゅうぎん通りが交差する場所にあつたこのモニュメントは、京町の人々にとってランドマーク的な意味を持っていた。それは小学校への登下校時、毎日目にするものであり、朝、店を開けるときに目に入るものであり、夜呑みに出かけた帰り道、タクシーで告げる「行き先」でもあつた。

それほど馴染みの深いものであるにも関わらず、この場所に地球儀ができた背景を知る人は少ない。資料を辿ると、京町銀天街にアーケードがかかる前、昭和29年の時点ですでに設置されていたようだ。「繁栄の象徴」という人もいるが、正確なことは分からずじまいだ。

京町は、江戸時代、長崎街道の起点として宿場や旅人相手の店が多く集まる場所だった。長崎街道は、参勤交代の往還路であり、鎖国政策の下で幕府が唯一外国との交易を許した長崎に通じる道として栄えた。この道を通じて九州の大名や多くの外国人が江戸に向かい、外国人が幕府への献上品として



謝辞

本冊子は、主に京町銀天街協同組合の店主の皆さんのお話をもとに、京町銀天街のアーケード設立前後から最近までの銀天街の物語を綴っています。写真は特に記載している場合をのぞき、京町銀天街協同組合店の提供になります。過去のことについては、可能な限り複数の方のお話を参照し、資料にあたるなどしましたが、個人の記憶をもとにしていますので、実際の状況と多少のずれがあるかもしれません。本冊子の性質をご理解頂き、ご容赦頂ければ幸いです。お気づきの点がありましたら京町銀天街協同組合までお知らせください。

本冊子作成にあたり、多くの方にご協力を頂きました。特に江戸時代、昭和初期にかけての京町界隈の様子について、馬渡博親氏にご教示頂きました。心より感謝申し上げます。

持ち込んだ舶来の品々が、京町の人々の目に触れることとなった。有名なのは、1729(享保14)年に広南(現在のベトナム・ホーチミン市)より八代將軍徳川吉宗に送られた白象だろうか。また、広告塔をはじめ、西洋文化のいくつかは京町に定着し、東京にも見られないモダンな光景として後に森鷗外が小説に綴ることになる。

ちなみに、日本に残る最古の地球儀は1700年にオランダでつくられたもので、現在長崎の松浦資料博物館に保存されているが、そんな地球儀の歴史と、京町に地球儀が置かれたことの間には、何かしら関係があるかもしれない。さらに、京町銀天街の脇を流れる紫川にかかる常盤橋は、伊能忠敬が日本地図作製のための測量に出発した場所でもある。この長さ二百メートルほどの商店街が、日本国内さらには世界に通じる道だったという歴史をきつかけに、この場所に眠る、今にもう目には見えないけれど、かつて確かに存在した時間や人、風景に思いを馳せてみたい。そして十年後、百年後にはそうした歴史の地層の一部になる今の光景を、少しかだけ形あるものとして残してみたい。

ソニア・クロネコ

創業およそ150年の老舗洋服店の歴史は、女性の社会進出の歴史でもあった

昔、今のようない水着がまだ無かった頃、男性は「金隠し」と呼ばれるふんどしに似た黒い布を腰に巻いていた。扱っていたのは大阪に本社のある「クロネコ」という会社で、その名前を使うことを許された小売店が北九州に二軒ある。その一つが京町銀天街のクロネコだ。京町銀天街で最も古いクロネコは創業およそ百五十年。現在のクロネコを知っている人には婦人服の店という印象が強いが、五代目の渡辺洋史さんが家業を手伝うために戻ってきた時は紳士服の店だったという。そもそも当時は婦人服を扱う店自体がほとんどなかったそう。社会に出て働く女性も少なく、女性が着飾って外に出る機会もほとんどなかったためだ。クロネコの歩みは女性の社会進出の歩みとも言える。

最初は、紳士服メーカーが男性とのペアルックとしてつくった婦人服をおまけ程度に置いていただけだったが、次第に「女性ものが売れる」と感じ始めた渡辺さん。本格的に婦人服を仕入れることを決めたものの、当初は仕入れ先の知識もコネもない状態。結果、当時出始めたばかりの女性向けファッション誌をめぐり、雑誌の最後に記載されているブランド名を手がかりに、直接ひとりで原宿に向かい、飛び込みで仕入れのお願いをしてまわったそう。やがて人との出会いにも恵まれ、順調に婦人服を仕入れられるようになっていった。

洋服をセレクトする際、当時から変わらないのは色へのこだわりだ。カラフルで可愛い、流行にとられないスタンダードなスタイルがクロネコの特徴。ベースにあるのは、七十年代にニュートラと呼ばれた、洗練されたトラディショナル・スタイル。店の歴史とともに、最良のお客さんの年齢も上がり、最近では四十〜六十代の女性に向けた商品も増えているが、大人のエレガンスを意識したセレクトは今も変わらない。

「このお店で一番古いものは何ですか？」と聞くと、なんと江戸時代の京町銀天街の区割りが描かれた巻物がでてきた。店の名前こそ違えども、間口の広さや一画の大きさは今とほとんど変わらない。渡辺さんが小さい頃は二十〜三十軒のお店がひしめき合い、子供であふれていたという京町銀天街。長い歴史の中では、火事で店舗が焼けたこともあった。婦人服が飛ぶように売れて商品を確保するのも大変だった頃に比べると、今は小売店にとってお店を続けるのが難しい時代だと言う渡辺さん。それでも「人間万事塞翁が馬」という言葉があるように、人生の幸や不幸は一概には判断できないもの。だからこそ、その時々起こることを受け入れ、前を見ながら進んでいく。





商工祭りの集合写真



お城まつりの集合写真

めの一種で、「よーお、よい、よい、やー」というかけ声とともに、身体全体で拍手を打ち込むもので、その動きは福を包み込み、運を持ち上げる姿を表している。

商店街の人々が集う祭りとしては、他にも「お城まつり」や「商工まつり」などがあつた。お城まつりは、小倉城の再建を祝つて1959（昭和34）年に始まつたもので、一時は商店街の店主らによる仮装行列なども行われていた。内容は変わったが現在も「小倉城まつり」として続いている。

「商工まつり」は1950（昭和25）年、小倉市政50周年を期にはじまつたと言われている。期間中は様々な割引セールが行われ、町は買い物客で賑わつた。魚町銀天街には、女装姿で練り歩く店主の写真も残っている。京町銀天街では人々が笠をかぶり毛槍などを手に町を練り歩く大名行列が行われた。当時、銀天街の店の多くは従業員を抱えており、各店舗から数名が参加するとあつという間に数十人の大所帯となつた。現在のように娯楽が無い時代、皆で集まつて一つの催しをつくり、商店街を訪れる人々に披露することは、催しを仕掛ける側にとつても楽しむ側にとつても、非日常を楽しむ貴重な機会だったのかもしれない。

商人の祭り 町の祭り

商売繁盛、
ヨイヨイヤー



小倉十日ゑびす祭の歴史は古く、1906（明治39）年まで遡る。明治30年代、小倉は深刻な不況続きで、「足立の山から小倉を見れば、売家、貸家の札ばかり」という狂歌がはやる程だった。そんな空気を一新しようと、それまで恵比須神社（現在の瑜伽神社）と魚町・京町の呉服店中心に行われていた「市」を他のエリアまで広げ、業種も拡大したのが「ゑびす祭」の起源だ。

現在の形の「小倉十日ゑびす祭 宝恵かご道中」は、昭和23年にはじまつた。毎年一月十日になると、商店街の世話役が芸者に扮したミス十日ゑびすを連れて町を練り歩く。世話役らは、町の随所で「商売繁盛、ヨイヨイヤー」という掛け声の「小倉ゑびす締め」を打ち込む。町には三味線や太鼓の音が響き、あでやかな芸者衆の華やかさが新しい年の始まりを彩る。ちなみに「小倉ゑびす締め」は、伝統的な手締



わっしょい百万夏まつり

毎年8月の第一土日開催

詳細はわっしょい百万夏まつり振興会(093-541-5472)まで

小倉十日ゑびす祭宝恵かご道中

毎年1月10日開催

詳細は小倉中央商業連合会(TEL&FAX 093-533-7337)まで。

オガワ時計店

京町一古い時計店には、
まちの歴史を刻む古時計がある

小倉で生まれ、幼少の頃から京町銀天街で過ごした生粋の商人、小川由之さん。現在の場所に曾祖父が最初にお店を開いたのは明治時代のこと。戦後、「これからは平和産業を」と、時計店に修行に出た小川さんの父親は、当初魚町に店を構えるが、1954（昭和29）年、小川さんが3歳の時に元々お店があった場所へ移ってきた。今もオガワ時計店に置かれている大きな標準時計は、時計がネジ式だった時代、人々が正確な時間を知るためのもので、父の代から続くものだ。今はもう時を刻むことはないが、それでも時計店の伝統として、お店の真ん中に置かれている。

昭和30年前後の京町は、魚町以上の人通りを誇っていた。まだ朝鮮戦争の名残が残り、街には進駐軍の姿もあった。

小川さんが小学生の頃、京町のアーケードが完成。現在ホテルが建っている場所は、当時銀行

で、しばしば金魚売りや古本屋さんがやってきた。夕方5時くらいになると、紙芝居の始まりを告げる拍子木の音が通りに響いた。近所に同じ年頃の子どもも多く、店を持つ親同士、忙しい時には自然と助け合う環境があった。

大学進学を経て、小川さんが再び京町に戻ったのは1974（昭和49）年。大学での専攻は、船舶など大型機械工学だったが、当時のお店の主流はメガネ。勉強会や研修会に参加し、検眼技術や加工技術を学び、資格を取得していった。当時はフレームに合わせ、手でガラスを削って成形していた時代。多い日にはガラスの入れ替えて一日20枚以上になることも。今は時計もメガネも修理が主流だが、当時は「とにかく販売に力を入れる」が先代の口癖だった。一日に修理できる数には限度があるが、販売は力を入れただけ伸びる。小売店の多くは、特定の企業や役所の指定店となっていて、職員は勤め先の指定店で商品を買っていた。定期的に商品を詰めたケースを持って取引のある会社を周り、会社で商品を販売することもあった。社内での雑談から新しい商品の話になったり、眼鏡や腕時計を新調する流れになったりしたそう。商いの原型でもある、顔の見える人と人との繋がりを感ずるエピソードだ。今もオガワ時計店の顧客は、

昔から付き合いのある馴染みの方が多いと言う。長年のお客さんのことは、好みを含めよく分かるが、最近はインターネットや量販店で購入し、修理の時だけ専門店を訪れる人が増えた。「馴染み」になる習慣が失われつつあると感じる。

オガワ時計店の70年近い歴史の中で、商品も、それをとりまく技術も変わった。店の前の風景も、年々変わっていく。その変化を楽観的にも悲観的にも捉えない。続く限り、続けられる限り、日々目の前の仕事と向き合っていく。



オガワ時計店

営業時間：10:00～19:00 定休日：第1・3水曜日・第4日曜日
北九州市小倉北区京町1丁目6-28 TEL 093-521-3663



旧・国鉄小倉駅舎と西鉄ボンネットバス [昭和30年(1955年)頃] 提供: 上田薫氏



常盤橋下の貸しポートで楽しむ人々。当時の広告塔上部は、円錐形だった。[明治中期頃] 提供: 上田薫氏

常盤橋と広告塔

「段々、小倉が近くなつて来る。最初に見える人家は旭町の遊郭である。どの家にも二階の欄干に赤い布団が掛けてある。こんな日に干すのでもあるまい。毎日降るものだから、かうして曝すのであろう。がらりと音がして汽車が紫川の鉄道橋を渡ると、間もなく小倉停車場につく。」

これは森鷗外の小説、『鶏』の一節である。旭町は、現在の京町銀天街の北側の一帯を指すが、この場所にはかつて遊郭や料亭が並んでいた。

文中に登場する小倉停車場は小倉駅のことだが、場所は今の西小倉駅から東に百メートル程の場所にあった。この後、小説の主人公の石田は室町の宿屋に入るのだが、室町から常盤橋を渡ると京町銀天街(当時の「京町商店街」)になる。

この常盤橋の袂には「円い柱が立つて」いて、「赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらい筆使いの画などを書いて、新しく開けた店の広告、それから芝居の見せものなどの興行の広告をする」のに使われていた。この広告塔と伝便(現在のメッセンジャー的な存在)を鷗外は、東京にはない小倉

の風俗と紹介している(森鷗外『独身』)。とはいえ、その後には、小倉で広告を貼る意味があるのは、常盤橋の袂と「大門町の石垣」くらいしかなく、広告も手描きのぎつくりしたものだ、という突っ込みが入るが、とにかく当時常盤橋の辺りは、小倉でも有数の人通りの多い場所であったことが分かる。室町から京町銀天街を抜ける道は小倉の目抜き通りで、文字通り人波をかき分けながら歩くような時期もあった、と昔を知る人は言う。

西から東への人の流れは、小倉駅の移転に伴い北から南へと変わり、以降京町銀天街は少しずつ人通りが少なくなっていく。郊外的大型店舗の発達による中心市街地の空洞化もその流れに拍車をかけた。時代の移り変わりとともに、まちの風景も変わる。かつて町の中心を走っていた路面電車は無くなり、変わりに南北を繋ぐモノレールができた。鷗外の小説に登場する地名の多くも今は消えてしまった。それでも復元された広告塔や、町中に残る石碑が、当時の面影を今に伝える。

つれづれ京町

NPO法人 北九州小規模連 補助事業部
障がい者自立支援ショップ

一丁目の元気

伝統を繋ぎ、新たな伝統を生む、
京町の憩いの空間

室町から常盤橋を渡ると京町銀天街に着く。橋からアーケードに至る道が一直線でないのは、江戸時代、城まで一気に攻め込まれることがないよう、わざとジグザグに道を配置した名残だという。この紫川に面した角には、百年近く続いた老舗のお茶屋さん「くしき」があった。京町銀天街を訪れる人々を迎え入れるこの場所に、今建っているのが「一丁目の元気」だ。

一丁目の元気を運営するのは、北九州小規模連。障がいを持つ人々が働く事業所が集まって生まれた団体だ。市内に障がい者が働く事業所は多いが、その商品を扱うお店は少ない。一丁目の元気は事業所の商品を専門に扱うお店として、市内中心街にオープンした最初の店舗だ。トイレは身体に障がいのある人にも使いやすい構造で、「まちのトイレ」と

して誰でも使うことができる。

2008(平成20)年 11月のオープン以来、障がい者施設と地域を結びつける役割を担ってきた一丁目の元気。お菓子や日常的な雑貨、アクセサリなど、幅広い商品をリーズナブルな値段で販売しているため、お客様の年齢幅も広く、性別を問わず多くの方に支持されている。健常者にとっては、障がい者の方がつくった商品にふれるきっかけになる場所であり、障がいのある方やその家族にとっては、情報収集や交流の場にもなっている。

事業所で、人の手によって一つずつ作られる商品には一点ものが多いのも特徴。陶器のカップやプレートは、普段使いのシンプルさと手作業による味わいを併せ持っていて、思わず手に取ってしまう。点字が印字された封筒・パッケージなど、事業所ならではの商品も。クッキーなどの焼き菓子は添加物なしで良質な素材が自慢。市内の事業所から毎週届く、減農薬の露地野菜も人気だ。毎月第3金曜日には「ワンコイン・マッサージ」も行うなど、リラクゼーションも提供している。二丁目の元気の売り上げは、手数料などを取ることなく、そのまま各事業所の収益になる。日々の買い物で、商品をつくらせる人々や事業所を直接的に支援することにつながるの嬉しい。

障がいや福祉は、時に当事者とそれ以外とを隔てる垣根にもなりがちだ。一丁目の元気は、作り手

と商品の魅力を前面に出すことで、そうした垣根を双方が乗り越えやすくする仕組みを提案する。障がいのある人たちが作るものが、普段の生活の中で当たり前前に楽しめる社会は、障がいのある人もそうではない人も、少し生きやすさを感じられる社会かもしれない。人の手の温もりを感じる商品が生まれるあたたかな空気につつまれたこの場所は、この街の「元気」の源だ。



障がい者福祉に関する情報も受け取れる

手書きのカフェ看板

一丁目の元気

営業時間: 11:00~17:00 定休日: 日曜日・月曜日
北九州市小倉北区京町1丁目6-1 TEL 093-383-6061



一足早く京町に春を呼び込む修善寺桜



「町衆海衆 秋まつり」藍島の魚介類を使った特製「京町鍋」の販売も



「千の灯り」約2000個の竹灯籠に火がともる



千支のペーパークラフト

まちに風情を

新年の京町銀天街で目を引くのは、アーケードに設置された巨大な千支のペーパークラフトだ。銀天街の店主によって毎年つくられているペーパークラフトを楽しみに訪れる人も多い。こうした取り組み以外にも、京町銀天街はこれまで、歴史ある商店街にふさわしい「風情」を感じさせる様々なイベントを手掛けてきた。様々な事情で今は継続していないものもあるが、ここで、ここ10年ほどの京町銀天街の取り組みを振り返ってみたい。

長らく夏の風物詩となっていたのは毎年8月に行われていた「京町風情 千の灯り」。2011(平成23年)年3月11日におきた東北地方太平洋沖地震で亡くなった方々の追悼の意を込めて始まったこの催しでは、紫川沿いの広場に数千個の竹灯籠が設置された。秋には「町衆海衆 秋まつり」。京町銀天街の飲食店が参加し、京町ゆかりのパフォーマーらによるステージが行われるなど、地域による地域のためのお祭りだった。これらのイベントはすでに終了しているが、「風情」をテーマにしたまちづくりは、今後も続いていく。

ところで「千の灯り」が行われた常盤橋広場には2014(平成26)年に植樹された、桜の木が一本ある。まだ若いこの修善寺桜は、3月中旬ごろから花が咲き始める寒桜の一種。細いながらもその開花は、冬の終わりとともに、新たな季節の始まりを感じさせ、人々を明るく気持ちにさせてくれる。この桜の木の下で行われてきたのは「桜まつり」。少々の飲食と、野点、そして音楽に踊りと、京町らしいこじんまりした春のお祝いだ。2015(平成27)年以降は、京町川柳大賞の授賞式も行われ、ある年には1950(昭和25)年につくられ、長い間小倉の人々に親しまれてきた「小倉音頭」を新たな振付けで復元披露する催しも行われた。「小倉音頭」(作詞・山田繁雄、作曲・古賀政男)は、これまで何人かの歌い手によって歌われてきたが、最初に録音された赤坂小梅によるものが、小倉の人間には最も馴染みが深い。小梅姐さんと親しまれた赤坂小梅は1920(大正9)年に芸者となり、京町の裏にあった旭検番より芸妓名「梅若」でデビュー。その後、美声を買われ上京し、赤坂小梅と改名し「炭鉱節」「黒田節」など数々のヒット曲を生んだ。「小倉音頭」はかつて地域の盆踊りやお城祭り、祇園祭でも踊られ、ある年代の人々には子ども時代の思い出が蘇る、懐かしさを感じる一曲でもある。

活魚居酒屋 味楽

京町の味所は、
若い三代目の経営手腕が光る

京町銀天街のアーケード内、戦時中に拡張された「ちゅうぎん通り」にほど近い場所に「味楽（みらく）」はある。通りを挟んだ向かい、パチンコ店「BASE小倉」がある一画に、米田さんの祖母・静枝さんがお店を開いたのは戦後間もなくのこと。物資もまだ十分でない時代、一銭焼きのような「粉もの」から始まったお店は、流通が戻るに従い現在の活魚中心の居酒屋スタイルに。

以前はうどん屋さんだったという今の場所に味楽が移ったのは1996年（平成8）年。そのわずか10年後、先代の父親が急逝。米田さんは26歳の若さで味楽の三代目となった。

先代のやり方を学ぼうにも父はもういない。「自分のやり方で進むしかない」と心を決め、最初に始めたのは毎日の朝礼だそう。「自分の姿勢ややり方を伝えるにはどうしたら良いか」を考えた結果だった。良い事も悪い事もすべてスタッフと共有した。共に学び、共に試行錯誤する。三代目独自の経営手法の基本はそこにある。

「人を大切」にする米田さんの姿勢は徹底して

いる。料理が新鮮で美味しいのは当たり前。その上でお客さんに長く親しんで頂くためにスタッフの教育に力を入れる。馴染みの方にお名前呼びかける。いつも注文されるメニューを覚えて声をかける。お客さんの様子に気を配り、常に先回りしてサービスをする。自ら考え動く、大変なこともチャレンジとしてがんばる優秀な人を獲得するために、基本給も高く設定する。もちろん味楽の仕事はハードで、同じ給料でもっと楽な仕事はいくらでもある。それでも仕事のやりがい、が、「また会いたい」と思わせる魅力的なスタッフを引き寄せる。

既成の概念に囚われず、独自の視点でユニークな試みに挑戦してきた味楽。以前伺った際は、多忙な調理場でつい皿を割ってしまうスタッフに対し、皿作り体験の機会をつくり、「自分が作った皿」に愛着を持つことで皿への意識を変えろという話をしてくださった。問題や困難に直面しても、常に前を向く姿勢は、新型コロナウイルスの広がりの中でも変わらない。先の見えない状況の中で、味楽の動きは早かった。2020（令和2）年4月の段階で4店舗すべての夜営業を停止。現在夜営業を行うのは「本店」のみ。京町銀天街の「別館」をセントラル・キッチン化し、「中銀通り店」はテイクアウト専門に。コロナも新たなビジネスチャンスと、クリスマス・オードブルやお節料理を手がけ多くの支持を得た。お弁当の販売を始めると、同じ商店街で働くご近所さんたちが毎日のようにお昼ご飯を買いに来てくれる。町の人たちに支えられている、

という思いを強くした。

どちらかというと職人気質だった先代から店を継ぎ、人を大切にする経営哲学で大きく変わった味楽。社会の状況が変わっても魅力的な味楽スタッフの笑顔は変わらない。そして、米田さんが「これだけはボロボロになっても使い続ける」と言う、祖母の代から続くメニュー黒板も、いつもの場所から味楽の台所を見守り続けている。



活魚居酒屋 味楽

営業時間：17:00～24:00(OS.23:30)

定休日：不定休

北九州市小倉北区京町1丁目6-28 TEL 093-531-6504

京町川柳大賞受賞句

第一回最優秀賞

出張は妻も夫もうれしい日

エミリー

第二回最優秀賞

初手当精一杯の花一輪

つる姫

ネクタイを外した日から好きな道

ぶちの白馬

第三回最優秀賞

何歳まで恋に悩めばいいのやら

直子

第四回最優秀賞

焼き鳥の串で未来を指している

智鈴

終活を一旦休む一目惚れ

井戸乃蛙

第五回最優秀賞

終活の進み具合を妻が聞く

俊元

平凡に生きて平均寿命越え

やんちゃん

第六回最優秀賞

席替えて老人会も盛り上がり

ほり・たく

しゃぼん玉高く高くと小さな手

和

第七回最優秀賞

肌荒れをさせたマスクで荒れ隠し

むらさき

長生きをしたいと思います孫の酌

猫柳



川柳大賞応募方法

以下を添え、メール・FAX、または郵送にてご応募下さい。

①川柳 ②柳名 ③本名 ④住所 ⑤電話番号

応募先

〒802-0002

北九州市小倉北区京町1丁目5-10-3F

「工房 自由空間 川柳大賞」係

FAX 093-541-3288 E-MAIL matsuoka@iki.bbiq.jp

京町川柳大賞について

2003(平成15)年8月にスタートした「センリュウ・ザ・京町」は、北九州で川柳句会「セブンティーン」を主宰するお鶴さんの協力の下、当時空き店舗が増えつつあった銀天街のイメージアップと人の流れを呼び戻す目的ではじめられた。2009(平成21)年から公募形式となり、お鶴さんが選んだ優秀作品をアーケード内に掲示してきた。続けていくうちに、川柳のある通りとして次第に認知度がアップ。川柳を眺めながら銀天街を歩く人の姿も見られるようになった。京町に句が掲げられることを目指して、投稿を続ける方も増え、投稿者は全国に広がりつつある。作品は2ヶ月ごとに入れ替えを行い、掲示された作品はこれまで1500句以上にのぼる。

京町川柳大賞・審査委員長 お鶴さんからのメッセージ

京町銀天街協同組合理事長・辻利之さんは、皆様に安心して楽しくお買い物やお食事をしていただける銀天街であるために、いろいろな取り組みをされています。

2003(平成15)年のことです。辻さんは一回だけの催事ではなく、お金をかけずにずっと続けられる物で、皆様に喜んで頂けること...と考え、私に協力を求めていらつしやいました。すぐにクラフト作家の松岡忠夫さんに相談しまして、銀天街に定期的に川柳を飾ろうということが決まりました。松岡さんから「まず十年続けましょう」と言われました。最初はお正月に「十円で彼下さいと初詣で」「福袋フリーサイズにしてほしい」他三句、私の川柳を。それを毎日新聞が大きく扱って下さ

り、「センリュウ・ザ・京町」がスタートしました。

2010(平成22)年からは投句用紙も作り、一般からも募集することになりました。

通勤通学で銀天街を通る皆様方から「毎日楽しみにしています」「もう全部覚えてしまいました。いつか替えるのですか?」「転勤で北九州に来ましたが、上司の名前より先に川柳を覚えました。」などなど沢山の声が届くようになりました。また2015(平成27)年より応募作品の中から年間賞を選び、桜まつりで表彰することになりました。

皆様の応援とご協力のお陰で投句は増え続けています。京町銀天街を歩きながら川柳を読んで頂き、ぶつと吹き出したり共感したりして楽しんでいただけることを願っています。

京町銀天街そして北九州を元気にしていきましょう。



京町川柳大賞受賞者、審査員の皆さんと共に。

京町川柳大賞・審査委員長 お鶴

愛媛県に生まれ、福岡県北九州市で育つ。西南女学院中・高等学校、西南学院大学を卒業。大学卒業後すぐに結婚し、一男一女の母となる。北九州で川柳句会「セブンティーン」主宰。

小林文具店

終戦直後の物が無い時代には、
手作りしたノートが
良く売れたそうだよ。

小林文具店は1925(大正14)年10月創業。自他ともに認める寡黙な店主・小林昭一さんは3代目。「仕事をするより遊んでいる方が良い」と、言いながらも、社長になって30年以上、お店に入った年から数えると50年。実に半世紀の間、家業を守ってきた。

現在の場所に文具店を開いたのは、小林さんの祖父。昔の事はほとんど分らないが、終戦直後の物が無い時代、紙を切り、重ねてつくった手作りのノートが良く売れた、という話は先代から聞かされたという。「紙屋」と呼ばれていた時代もあるそうで、実際、古い地図には「小林紙店」と書かれている。店ができた当初の京町は、小倉の目抜き通りとして栄えていたが、1958(昭和33年)に小倉駅が今の場所に移転して以降、徐々に賑わいが薄れていく。東京での修行を終え、オリンピックの翌年に店で働き始めた小林さんは、かつての京町の賑わいを肌で感じたことはない。

それでも当時は、今ほど商店街主体の販促活動は必要とされていなかった。国の経済も上り調子な時代、家業に精を出すことで、日々の暮らしが潤い、地域に活気が生まれた。そんな中、記憶にあるのは、近所の商店主が集まって作った京町有名七店会のことだ。メンバーは、当時の京町二丁目(現在の京町銀天街協同組合二組)に店を構えていた七店。眼鏡のセコール、オガワ時計店、小林文具店、大長ふとん店、高橋電気店、船津カバン店、文苑堂(書店)。特に何をしたというわけでもないが、正月には八坂神社で餅まきをしたものだった。

日用品である文具は、昔から堅い商売と考えられていた。かつて学校の近くには、文具や駄菓子などを置いた雑貨屋が一軒くらいはあったものだが、それも手堅さ故のことだろう。ただコンビニやスーパーが増えるにつれ、そうしたお店も少なくなった。小林文具店は、昔から卸しと小売りの両方を行っていた。商品を卸すのは主に近隣の小売店や会社。アルバイトの男子高校生が、自転車に事務用品を載せて配達に行っていたという。現在の小林文具店の顔は、和紙や季節ごとに入れ替わる様々な種類の便箋、封筒、ポチ袋といった紙製品。和紙を用いた手芸品のサンプルが置かれたショーウィンドウには、外国人観光客もしばしば足を止める。妻の由紀子さんが仕事の傍ら続けている折り紙作品も華を添える。事務用品のようにカタログのある商品は価格競争に取り込まれてしまう。だからこそカタログのないオリジナルティのある商品をセレクトしている。

昔は木造二階建てだった小林文具店。老朽化もあって

平成元年に建て替えた。店舗の奥の倉庫には、昭和24年製の紙の断裁機が置かれていて、今も現役で動いている。かつて向かいにあった銀行はホテルになり、馴染みの店も減った。七店会のメンバーの店も少なくなったが、それも街の長い歴史の中の緩やかな移り変わりなのかもしれない。2015(平成27)年、創業九十周年を期に、昭一さんは会長となり、息子の慶昭さんが四代目に就任した。慶昭さんは妻・千鶴さんと共に、100周年に向け奮闘を続けている。



小林文具店

営業時間:10:00~18:00 定休日:第1・3日曜日
北九州市小倉北区京町1丁目5-7 TEL 093-521-0384

FUN

- 1 個性的なアメリカン・ヴィンテージが揃う。
P.22

はきもののカクシン

- 4 昭和25年の「京町の大火」では、辺り一帯が焼ける中、奇跡的に焼け残った。
P.40

辻利茶舗

- 2 大正時代、最初に辻利茶舗が店を構えたのはこの辺り。
P.36

カフェ・ド・ファンファン

- 5 レトロ感ただよう、昔ながらの喫茶店。1967年創業。

一丁目の元氣

- 3 障がいのある方がつくる、一点ものの雑貨多数。
P.10

クロネコ ソニア・ジグ店

- 6 「金隠し」で有名なクロネコブランドを扱う紳士服専門店としてはじまった。
P.2

梅林化粧品店

- 1 進駐軍がいたころは、スーベニアショップとして、ノリタケなども置いていた。

久志起

- 2 口の中でふわりと溶ける、和菓子・あわ雪が名物だった。

京町ビンゴ

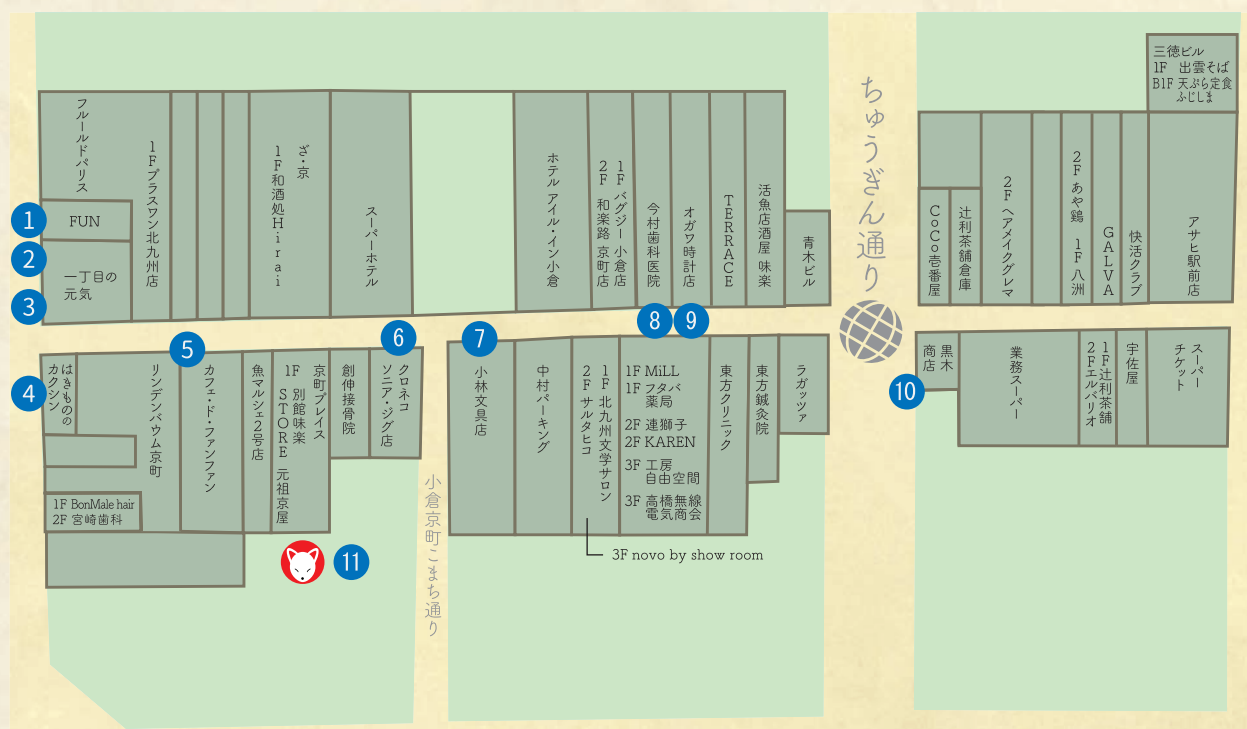
- 5 京町ビンゴは、1～100まで数字が書かれた穴にボールを投げ、入った番号を消していく遊び。景品はお菓子が多かった。

文苑堂書店

- 3 後にちゅうぎん通沿いに移転。京町有名七店会のメンバーでもあった。

喫茶・若竹

- 6 ぜんざいが有名だった若竹。若者のデートスポットでもあった。



小林文具店

- 7 大正14年創業。戦後は手作りのノートが良く売れた。
P.18

今村歯科医院

- 8 昔は土井楽器店さんで、一時はレコード類も販売。今で言うインスタライブなども行っていたそう。
P.30

オガワ時計店

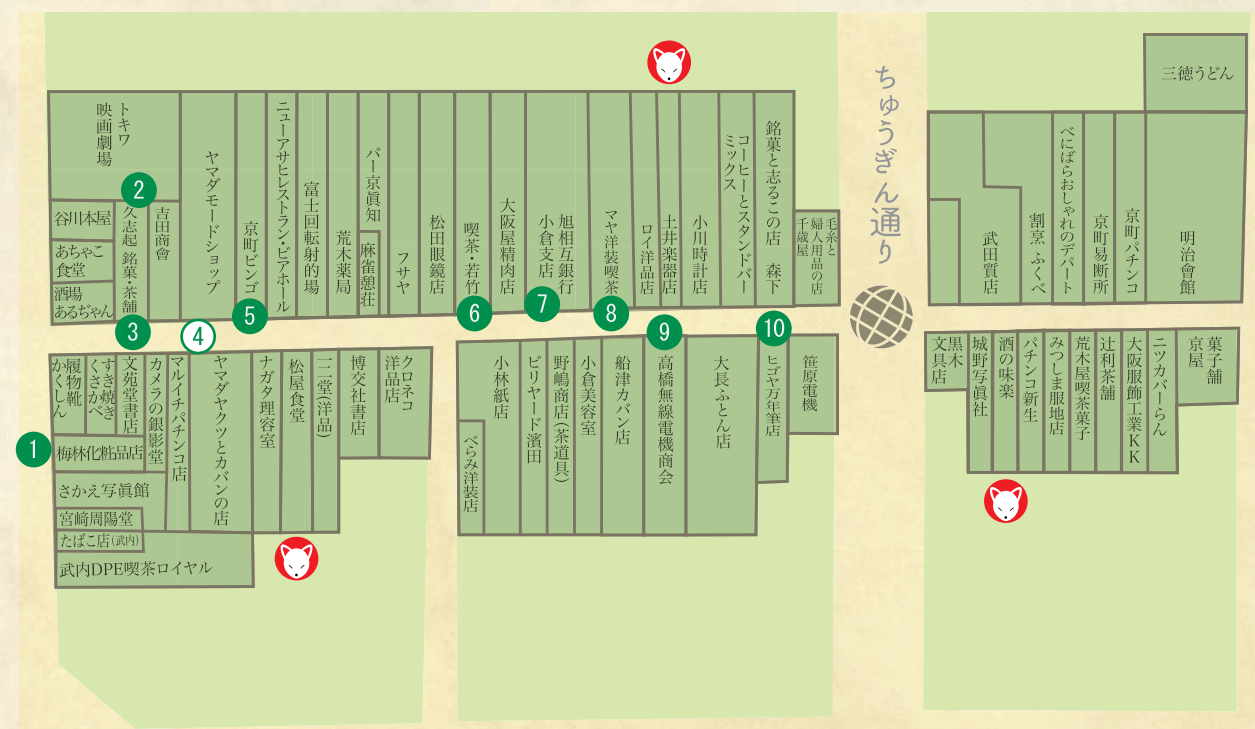
- 9 創業時代からある大きな標準時計の時報はウェストミンスター教会の鐘の音。
P.6

たばこ 黒木商店

- 10 昔は映画の前売り券も扱っていた。

一丁目のお稲荷さん

- 11 勝山会館(現:京町プレイス)建設時に、屋上に移設された。2丁目、3丁目のお稲荷さんは現存していない。



旭相互銀行

- 7 安田銀行→富士銀行→旭相互銀行。石造りの建物は同じで、中の銀行は何度か変わった。

マヤ

- 8 北九州の文化人が集った喫茶店。シャガールの絵も飾られていた。

高橋無線電気商会

- 9 初めてのテレビはここで買った、という人も多い。

ヒゴヤ万年筆店

- 10 万年筆店の奥は、食堂だった。

お稲荷さん

- 昔は各町内にお稲荷さんがあった。

これからの京町をつくる
若い店主の目は、
まだまだ先を見つめている。

アメリカの古着や雑貨を中心に扱う「FUN」が京町にできたのは2015（平成27）年。西村さんにとって二店舗目となった京町の店は、紫川にかかる常盤橋の傍にある。明るく雰囲気の良い場所だな、と前から狙っていた場所に店を構える幸運を得た。

古着は学生の時から好きだった。最初は安さに惹かれて買っていたが、次第にヴィンテージの奥深さに目覚めていく。やがてヴィンテージの世界で仕事を、三十三歳で独立。当初は買い付けで様々な国や都市を廻ったが、次第に自分の好みが決まり、今はアメリカの西海岸を中心に年々四、五回買い付けに出かける。西海岸の気候の良さは、その地域に住む人たちの陽気さや街の開放的な空気を生み、そうした環境から生まれる土地の文化が、訪れる街々で出会うヴィンテージ・アイテムに反映されているように感じる。

そんなヴィンテージの魅力は、服がつけられた

当時の人々の熱が詰まっているところだと語る西村さん。最高の生地で最高の服をつくり、自分たちが作った服を世界中に広げたいという野心。着る人のことを考え、労働者のために頑丈なジーンズを作ろうと、生地にも糸にも製法にもこだわって生み出された一着。大量生産でコストを下げ、シーズンが過ぎれば捨てるしかない今のファスト・ファッションとは異なり、一点一点が特別で同じものはふたつとない。十方で買ったジーンズを十年履いて、手放す時にはさらに値が上がりつつあるということがあるのがヴィンテージの世界で、「着を大切に受け継いでいくサステイナブルな文化でもある。

時代、ジャンル、製法や細かなスタイルなど、ヴィンテージで学ぶべきことは多い。古着店はオーナーの趣味嗜好が反映される面白さがあるが、知識がなければ買い付けられない世界でもある。FUNの幅広い商品ラインナップの背景には、西村さんの長年の経験に裏打ちされた確かな知識があり、それが様々な好みのお客さんを惹きつける店作りにつながっている。

そんな西村さんの夢は「トータルでかっこいい人をつくる」こと。洋服以外にも私たちの生活に深く関わる分野にビジネスを広げていきたいと考えている。洋服で見た目をかっこよくするだけではなく、家具にもこだわり、生活空間がかっこよくなると面白い。そんな思いで2020年秋に新店舗「「E HOME」」をオープン。さらに洋服の下肉体もかっこよく、とジムのプロデュースも視野に入れる。釣りでも

なんでも、好きなことにはスタイルからこだわりたい。それなのにかっこよくなるために通うジムやそこで着るスポーツウエアに、多くの人がこだわりを見せないのはなぜなのだろう。ジムの雰囲気もそこで働く人もおしゃれで、生活にかっこよさを求める人たちに選ばれる、そんな場所をいつかつくりたいと夢見ている。「一緒に働く「人」を大切に、もっとチャレンジをして、新しいサービスをにつくり、魅力的な街をつくっていききたい。FUNを構える京町の街づくりにも、そんな思いで関わり続ける、若き商店主の挑戦はまだ続く。



Clothing&Antiques FUN

営業時間:11:30-20:00 定休日:なし
北九州市小倉北区京町1-6-1 TEL093-953-7994

つれづれ京町

アウトレットショップ

MiLL

京町の隠れ家には千五百点もの
アイテムが詰まっている

京町銀天街に一軒のアウトレットショップがある。この場所にアウトレットショップを開いたきっかけは、社長のひらめきだったという。新しい店舗をオープンする際には、いつも直感的に場所を選び、名前も内装の雰囲気も社長の一存で決まるそう。そうして2002（平成14）年に誕生したのが「MiLL」だ。

小さいお店とはいえ、常時千五百点以上のアイテムが揃うMiLL。さらに週に一度は新しい商品が入ってくる。セレクトショップに比べ、アウトレット店は扱う商品数も多い。お店のどこにどんな商品があるかを把握しつつ、時にはお客さんの対応をしながら新しく入ってきた商品を並べる。機転とスピードが要求される仕事だ。

MiLLは洋服以外に、靴やアクセサリーといった雑貨も多く揃えている。結婚式のドレスなど、通常のアウトレット店には置いていないフォーマルなアイテムを置いているのも特徴だ。次

のシーズンに合わせた商品中心のセレクトショップに比べ、「今、着られる」ものが多いのも嬉しい。一方で、時に季節外れのものも在庫に混じっているため、冬場、南国に旅行に行くのにTシャツが必要、といったリクエストにも応えられる。

アウトレット店ゆえに商品の在庫は限られていて、サイズや色違いなども無い場合が多い。商品の入れ替わりも早いいため、一着との出会いをより強く感じるという。商品ラインナップの幅が広く、客層も様々なため、ディスプレイもフェミニンからボーイッシュまで常に複数つくる。それぞれ好みの違うお客さん、一人ひとりに何か心に留るものを見つけて欲しいと思っている。

セレクトショップと同じようにアウトレット店もそれぞれに特徴がある。MiLLは可愛らしさの中にも大人っぽさ、ラグジュアリー感のあるものが多い。ヴィヴィッドなカラー、個性的なプリントやデザインも魅力だ。様々なジャンルが揃うため、お客さんの年齢層も幅広い。同じビルの美容院やエステサロンのスタッフさんがMiLLで購入した洋服を着てくれ、それを見たお客さんが「それ、いいですね」と足を運んでくれることも多い。「地域に支えられていると思います。」

そんなMiLLでの仕事の面白さは、お客さんとの密な関わりだという。商業ビルの中のお店に比べ路面店には、そこを目指してやって来て下さる方が多い。目的を持ってやってくるお客さんが多い分、会話を重ねて深く接客ができる。スタッフに意

見を求めてくれるお客さんが多いのも嬉しい。お客さんひとりひとりの趣味趣向を考慮しながら、全身のコーディネートが決まった時には、何とも言えない達成感がある。普段セレクトショップで販売しているものが半額程度で購入できるお得さと、ファスト・ファッションにはないデザイン性、素材の良さを大事にしつつ、今後もMiLLらしいお店づくりを目指したいと思っている。



アウトレットショップ MiLL

営業時間：11:00～19:30／日祝のみ11:00～18:30

定休日：年末年始

北九州市小倉北区京町1丁目5-10 TEL 093-521-5666



京町二組(二丁目)の集合写真



京町一組(一丁目)の集合写真

小倉の夏は太鼓の音とともに

京町銀天街の古い写真を探していると、必ずといってよい程出会うのが祇園太鼓の集合写真だ。年代はまちまち、撮られた場所も年によって異なるが、どの家にも必ずあるその写真を見ながら、昔話に花が咲く。祭りの浴衣に身を包んだ人々の表情は、普段よりも引き締まり、美しい。山車のデザインも、浴衣の模様も、人々の顔ぶれも、少しずつ変わってきたが、ゆるやかに打ち鳴らされる小倉祇園太鼓のリズムは昔のままで。年に一度のこの特別な時間。その中に身を委ねると、伝統や、それを長年共有してきた共同体の繋がりとといったものが、確かにこの場所に息づき、そして受け継がれていることを感じる。

小倉祇園は、江戸時代、小倉城を築城した細川忠興が、無病息災と城下町の繁栄を願って、1617年に祇園社（現在の八坂神社）を建て、京都の祇園祭を取り入れたのが最初とされている。山車の前後に一つずつ太鼓を載せ、「両面打ち」といって、太鼓の両側に打ち手を配すのが小倉祇園太鼓の特徴だ。それにジャンガラと呼ばれる擦り鉦がついて調子を取る。江戸当時、小倉祇園祭と下関の赤間宮の先帝祭は、不思議なことに天候に恵まれず雨が降

ることが多かったそう。その分晴れると大勢の人で沸き返り、賽銭の山ができて「関の先帝、小倉の祇園 雨が降らねば金がふる」と言われるほどだったという。

7月1日に打ち初め式が行われ、太鼓の稽古が解禁されると、夕暮れと共に、まちのあちこちらで太鼓の音がし始める。昼間の暑さがゆつくりと昇華されていくような、水っぽい熱気と緩やかな太鼓の音。小倉の夏はそうやってはじまる。祭りは、「宵祭り」と呼ばれる「無病息災」「商売繁盛」を祈願する練り歩き、参加団体が優勝をかけて競い合う「競演会」、市役所前の通りで太鼓を打ち鳴らす「太鼓広場」と続き、最終日の夜は商店街を練り歩きながら、祭りが終わるギリギリまで太鼓が鳴り、「ヤッサヤレヤレヤレ」というお囃子が響く。商店街は人で埋まり、複数の団体が打ち鳴らす太鼓の音が重なり合いながら、アーケードに共鳴し、終わりなきトランス状態へと人々を誘う。

今では7月の第3土曜日をはさんだ金土日曜日に開催される祇園太鼓だが、昔は7月10日～12日の3日間と決まっていた。山車がある町内の子どもたちは平日、学校を早退することを許された。何とも言えない優越感と祭りの高揚が子どもたちを興奮させた。

京町の歴史



江戸時代の地図

現在の京町一組付近の地図。店舗こそ入れ替わっているが基本的な地割りに大きな変化はないことが分かる。江戸時代には間口の広さで税が課せられたため、必然的に間口が狭く奥行きのある「うなぎの寝床」型の店舗となった。敷地の中央に庭のある家、倉のある家もあったそうだが、火事や建て替えを経て今は残っていない。

明治時代の地図

1900(明治33年)発行の小倉市外案内図。紫川にかかる橋は「常盤橋」のみで、常盤橋に繋がる京町通りがメインストリートであったことが伺われる。また、北から「京町」「大坂町」「堺町」となっているが、これは江戸時代・小倉藩初代藩主となった細川忠興が関西の地名にちなんで名付けたものだと言われている。



京町三組(三丁目)の集合写真



小倉鉄道沿線名所図絵

昭和3年発行の絵地図。記されている小倉駅は移転前のもの。1915年に小倉鉄道添田線の駅として開業した東小倉駅も記されている。道路上の赤い線は路面電車の西鉄北九州線。市民の足として親しまれたが2000年に廃線となった。



小倉祇園太鼓

詳細は、小倉祇園太鼓保存振興会事務局
(TEL 093・562・3341)まで。

毎年七月第三土を
含む金土日に開催

京町銀天街の大人組が最後に競演会で優勝したのは1971(昭和46)年のこと。この時は「題名のない音楽会」などテレビ番組に出演し、ハワイでも太鼓を披露した。当時若手だった叩き手の心に残っているのは何といっても「長田のおいちゃん」。今は無き「ナガタ理髪店」の店主・長田さんの熱心な指導で祇園の精神を叩き込まれた、と感じている人も多い。晩年、足腰が弱くなっても変わらず祭りの時期は大酒を飲み、山車に上って盛り上げた。長田さんが亡くなった年は、山車に遺影を掲げ、町を練り歩いた。祭りの間、女性たちは叩き手のために食事や飲み物を用意し、振る舞う。汗をかいた身体に、スイカのキンツと冷えた甘みが染み渡る。祭りが終わると本格的な夏がはじまる。やがて一年が過ぎ、梅雨が明けるとまた、祭りの季節がやってくる。

今村歯科医院

「先生、よっぽど歯が好きなんやね」と言われる歯医者がある医院

今村歯科医院が現在の場所に開院したのは1966(昭和41)年のこと。京町銀天街の店舗は、江戸時代の名残で間口の狭いうなぎの寝床式。それを二つに割り、半分は雑貨店、もう半分で歯科医院を営んでいたそう。幅わずか数メートルの細長い空間に治療椅子は二台。初代院長・義和さんの義母が営んでいた隣の雑貨店は、食料品から芸者さん向けの扇子・三味線まで扱っていた。

当時の京町銀天街はまだ舗装されておらず、土がむき出しの通りを子どもたちが駆け回っていた。やがて雑貨店を閉じ、木造から鉄筋コンクリートのビルに建て替え、1996(平成8)年の京町の大火をきっかけに、歯科医院をビルの二階から一階に移し今に至る。現院長は義和さんの息子・義治さん。医院では、先代が大先生、義治さんは若先生と呼ばれている。

小さな頃から医院で過ごす時間が長かった若先生にとつて、歯医者への道は自然な流れだったそう。地元の歯科大を卒業後、大学院で研究を続ける傍ら実家の手伝いをはじめた。患者さんには90歳

を超える方もいれば、二世・三世代で通っている方もいた。働きだした当初は、なかなか口の中を見せてもらえなかったという義治さんも、時間をかけて患者さんの信頼を得、2011(平成23)年に正式に二代目を継承した。

歯科医療の世界は目まぐるしい。次々に新しい技術が生まれ治療法が変わっていく。週末はセミナーや学会発表、新しい資格取得のための勉強でつぶれていく。それでも以前はできなかったことができるようになったり、これまで抜くしかなかった歯を残せるようになることが嬉しい、という若先生。専門はインプラントを始めとする再生技術だが、むやみに歯を抜くことはしない。歯周病でぐらぐらになっても、神経を取った後でも、残せる限り残す。理由は、健康な歯と脳との間の密接な繋がりが。

例えば、人が「幸せ」を感じる時に分泌されるセロトニンというホルモンの増減には、歯からの刺激が関係することが分かっている。人の記憶を司る脳の海馬にも歯から多くの信号が送られている。歯は、単に食べ物を消化する機能だけではなく、人の人生を豊かにする働きがあるのだ。

社交的で、馴染みの患者さんがやってくる世間話に花が咲く大先生とは対照的に、一つのことには没頭する「オタク気質」の若先生。マスクをしてマイクロスコープという名のゴーグルのようなメガネをかけ、ひたすら歯と向き合うこの仕事は、実は「とても合っている」そう。世間話は苦手でも歯

のことになると話が止まらない。一人ひとりの患者さんと長くつき合う「まちのお医者さん」として、それぞれのニーズに寄り添いつつ、時には治療法を巡って喧々諤々の議論になることも。歯の痛みに耐えきれず「抜いてくれ」という患者さんを説得した際は、帰り際「先生、よっぽど歯が好きなんやね」と捨て台詞のように言われたそうだ。ある意味、歯医者にとつて最高の褒め言葉かもしれない。



今村歯科医院

営業時間：9:00～19:00(月・火・木・金)／9:00～13:00(水・土)
定休日：日曜日・祝・祭日
北九州市小倉北区京町1丁目6-29 TEL 093-521-5666

つれづれ京町

ヘアメイク グレマ

行けば元気になる。
そんな町の美容室を目指して。

京町銀天街を歩いているとふと目に留まる、落ち着いたレンガ壁の一面。人が二人すれ違えるくらいの細い入り口から2階に続く階段を上がった先に、1996年(平成8)年創業の美容室グレマがある。一見美容室らしからぬ細長い、奥行きのある空間にカット台が6つ並んでいる。魚町育ちで、魚町銀天街の美容室で修行した店長の中村千恵子さん。グレマには修行時代からのお客さんも多いと言う。「中学生の頃から通ってくれていた方が、子どもを連れてきてくれたりするのは嬉しいですね。」お店と同じく年を重ねるお客さんのために、髪のエイジングケアにも力をいれている。また、コロナ禍でも安心してリラクセスしてもらいたい、「リカバリー・メニュー」の提供も始めた。水素を吸引することで首・肩の凝りをほぐし、全身の血流を良くすると共に、顔のリフトアップや肌の透明感アップといった効果も得られるというものだ。お客さんや社会の状況に応じて、新しいことに挑戦をし続けてきたグレマらしい試みだ。

20年以上に渡って、町の美容室グレマを作り上げ

てきた店主の中村さん。実は学校を出て最初に就職したのは銀行だった。勤め始めてすぐ「向いていない」と思ったものの、自分が本当に何をしたいのか当時は分からなかった。自分探しのつもりで、いろいろなることに挑戦する中、とあるきっかけで美容師に興味を持つ。とはいえ、銀行といえは誰もが羨む安定した職業。それを辞めて美容師の学校に通うことに両親は反対した。「だから最初は両親に内緒で通っていたの」。入学のための書類に親の名前でサインをし、カットの練習に使うマネキン頭部を当時はやりのボウリングバッグに入れ、ボウリングを装って学校通いを続けたそう。もともとの作りが好きなこともあって、美容師の仕事は天職だと思えた。自分がやりたいことを実現するためにロンドンのサスーンアカデミーに通ったり、舞台メイクをしたりと様々な挑戦を続けた。チャレンジしないと体験も生まれない。だから若いスタッフにも挑戦を続けて欲しいと思う。それぞれが自分らしく、やりたいことを見つけながら仕事ができるよう、スタッフの育成にも力を入れている中村さん。グレマの和気あいあいとした空気と、キリッとしたスタッフの表情に、仕事への愛情とそれぞれの頑張りがかがわれる。

そんなグレマにはエステ部門があり、仕事について6年目にして系列店のエステ・コンクールで4年連続全国一位の快挙を遂げたスタッフがいた。グレマを卒業した彼女にこんな質問をしたことがあ

る。「グレマを一言で表現すると？」彼女の答えは、「あたたかい場所」。髪を切るだけではない、そのことで自分らしくなる場所、元気になれる場所。京町の「グレートマザー(グレマ)」は今日も訪れる人たちに愛と元気を渡している。



ヘアメイク グレマ

営業時間:10:00~19:00 定休日:月曜日・第1火曜日・第3日曜日
北九州市小倉北区京町2丁目1-23-2F TEL 0120-551-806



東映会館

常盤座 (船頭町)

京町の大衆芸能

かつて、京町銀天街の周辺には映画館がたくさんあった。

1960(昭和35)年の時点で、小倉市(現小倉北区)の映画館の数は38館。その中でも京町の人々に馴染みが深いのは、大映、東宝、喜楽館など、京町銀天街周辺の映画館だ。「大映」(後の東宝プラザ)は洋画で「東宝」は邦画。「喜楽館」は日活映画だった。旧電車通りには「東映会館」があり、平通り沿いの「中央会館」はデイズニー映画が多かったという。紫川沿いの、京町銀天街入り口近く、現在ではマンションになっている場所には「ときわ映劇」があつて、旧作を3本だてで見せていた。値段は30円だった。

そもそも小倉に最初に常設芝居小屋ができたのは、1881(明治14)年のことだった。小倉の豪商、中原嘉左右による「定演劇所志撰社演劇場」が京町の裏手にあたる船頭町の一画に開業。当時の日記からは、中原が劇場の有無を都市の文化や経済の指標と考えていたことが伺える。当時の新聞でも度々演劇が紹介されている。とりわけ社会を風刺した「オツペケペー節」で絶大な人気を誇った川上音二郎については、数々の記事が残る。やがて明治20年頃になると、各地に常設劇場が作られる。船頭町には常盤座と旭座。他にも大門の稲荷座、室町の迎陽館、京町六丁目の育成座などが有名だった。昭和の初め頃までは、役者の小屋入りの際、人力車を連ねての顔見世なども行っていたようだ。旭座は喜楽館の前身であり、常盤座の主屋があつた場所には、後に東宝プラザが建てられた。育成座は、後に小倉倶楽部となり、活動写真を上演する初の常設館となった場所でもある。

小倉の映画館の多くは、21世紀を待たずして閉館。民間の劇場も無くなったが、小倉中心部には、ここ十数年の間に劇場、美術館、文学館といった公共文化施設が立て続けに誕生。2010(平成22)年、北九州芸術劇場が主催する「北九州演劇フェスティバル」で、京町銀天街の空き店舗を活用した期間限定ミニ劇場がつくられたのをきっかけに、京町に舞台芸術に関わる人々が集まるようになり、2013(平成25)年にはオリジナルダンス「踊って!!京町」が作られた。京町の歴史を歌詞や振付けに盛り込んだこの作品は、毎年、秋祭りで踊られ、多くの方に一緒に踊っていた。秋祭りの終了と共に披露の場は無くなってしまうが、京町銀天街の大事な記憶の1ページに刻まれている。

「踊って!!京町」 作詞 イクダー(百田彩乃、國武郁美)
作曲 泊達夫 振付 百田彩乃

※
わくわく シャカシャカ チクタク キラキラ笑顔で踊って!!
べらべら ほっとして カランコロン キラキラ笑顔で
踊って!!踊って!!京町

商人の町 京町の 軌跡をたどってみてごらん
白象通った常盤橋 参勤交代 祇園太鼓
街のおもむき感じれば 歴史の足跡みつかるとよ

※ 繰り返し
あの子が行った思い出を 京町歩けば思い出す
いつもよりちょっとおしゃれに決めて あの子の笑顔に逢うために
ビンゴに映画 路地裏探検 思い出に残る大切な場所

※ 繰り返し
今日の京町どこへ行こう? 元気な店主に会いに行こう!
こだわりぬいた 店主の自慢は (「私のすぐる下駄雪駄」
「四代続く紙・文具」「京町見守る古時計」)
幸せいっぱい お腹いっぱい 今日からあなたも京町っ子

※ 繰り返し
手を取り輪になり ステキな時間 季節が巡る あっという間
千の灯に照らされて あの子の笑顔がよく見える
紫川に映るのは 面影きらめく京町

※ 繰り返し
時が流れる京町の 街並 ふれあい ステキな笑顔
刻み続けて 苦楽とともに 笑い飛ばして いつまでも
歩いていこう京町を 今日明日もこれからも

※ 繰り返し
商売繁盛 ヨイヨイヤー!

踊って!!京町
曲付き動画



辻利茶舗 京町本店

世代から世代へ、
新しい発想と行動力で
店の未来を開くお茶屋

万延元年、京都の宇治で創業した辻利茶舗。九州支店を構えるために、現会長の辻利之さんの祖父母が京町にやってきたのは1923(大正12)年のこと。店舗開設後数年で京都に戻るはずが、京町界隈の風情と人情、商環境に惚れ込み、小倉に留まることを決めた。当初紫川のもとにあった店舗は、昭和のはじめに現在の場所に移転。後に魚町にも店舗ができ、辻さんは1954(昭和29)年に魚町店の二階住居で生まれた。東京に進学後、宇治で修行をして25歳で小倉に戻った辻さんは、京町店を営んでいた叔父の引退に伴い、京町店の運営に関わるようになった。先祖が惚れ込んだ京町の風情についてはほとんど分からないが、豆腐屋や金魚屋、椎の実や栗を売る人など、様々な人が行き交う京町の通りには、魚町とは異なる趣があった。

ちが良くなるためには、自分の店がまず魅力的でなければいけない。その思いで様々な試みを行った。お茶の焙煎機をお店の前に出し、手作業で少しずつ焙煎しているのも、お茶の香りで京町らしさを演出したいという思いがあつてのことだ。専門店の多い京町銀天街。それぞれのお店の特徴が前面に出ることが、まちの表現につながると考える。

商店街の活動に精力的に関わる一方、40歳で社長になった辻さん。先代曰く、ペットボトルが黒船のようにやってくる「時代に、今を生きる若者に支持されるお茶屋を目指し、スイーツなどお茶を使った商品の開発をすすめ、お茶のある生活提案を行った。1994(平成6)年に魚町の店舗に喫茶スペースを開設。翌年には京町にも喫茶を設ける。今では、学生でも気軽に寄れるカフェとして、放課後の高校生から年配の方まで幅広い層が集う場となった。

一方で、「小倉で世界に通用するお茶屋の新業態をつくる」というビジョンを掲げ、商品パッケージなどのデザインを一新、小倉に根ざしながら商品はグローバル・スタンダードを目指した。とはいえ海外に店を出すつもりは毛頭なかったが、大学時代の縁をきっかけに台湾への出店が決まる。その後、シンガポール、中国にも現地法人との共同出店という形で海外店舗ができることに。それを実際に形にしていたのは「若いスタッフたち」と辻さん。自身の描いたビジョンに、様々な人の繋がりと若い力が加わり実現した海外出店だった。

それでも時代の流れは早い。海外の店舗とスカイプ会議をしている若いスタッフを見ると、時代が新たな世代に移ろうとしていることを感じる。自分にはない新たな感性や取り組みを形にするために、60歳で社長職を退いた。とはいえ、店でのまちでの辻さんの役割は終わらない。江戸時代から交通の要所であり、文化や産業が発展し、多様な人々を受け入れてきたこの街の魅力をもう一度今の仕方で編集し、小倉らしさを発信したい。必ずしも大きな火花を打ち上げるのではなく、顔の見える関係と持続的な活動のあり方をベースに、これからも、店にそしてまちに対して自分ができることを淡々とやっていこうと思っている。



辻利茶舗 京町本店

営業時間: 10:00~20:00 定休日: 年中無休(元旦以外)
北九州市小倉北区魚町1丁目2-11 TEL 093-521-1215



オガワ時計店の店舗前にて



オガワ時計店から地球儀をながめる。



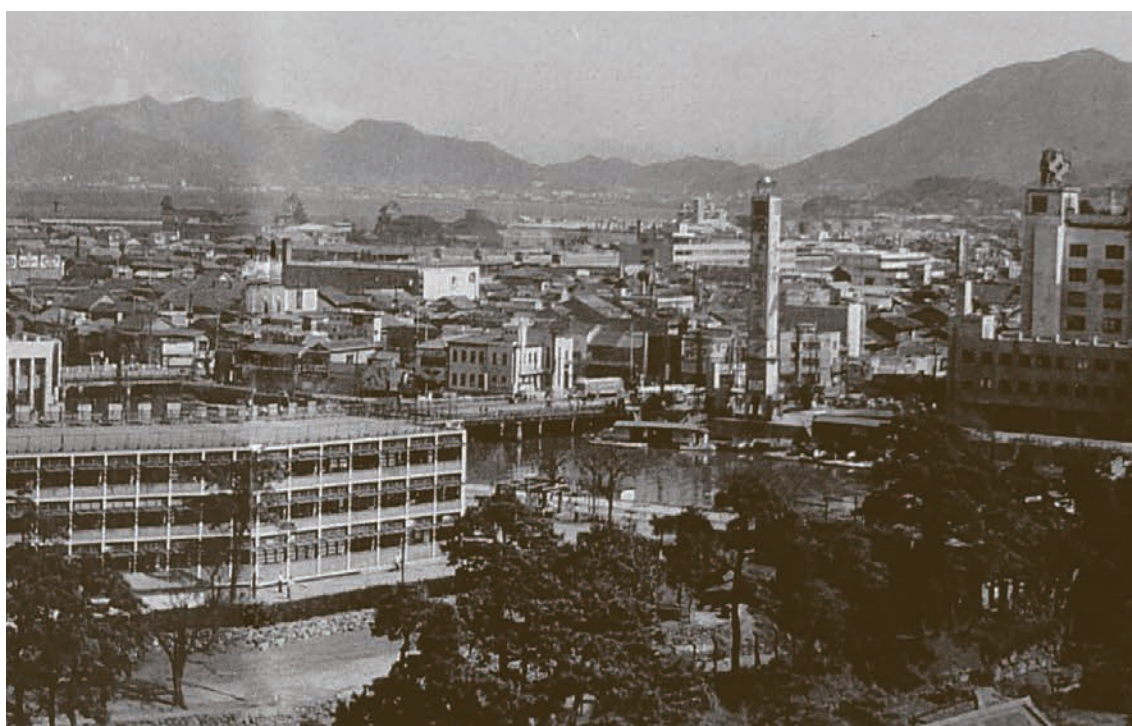
昭和26年春、撮影 履物屋カクシンが正面に見える。
カクシンの向かいが空き地なのは火事の後か？



紫川の東側にあった「くしき」。昭和8年撮影。



京町の裏手、船頭町にあった映画館。日活映画の封切館として人気を博した。



小倉城天守閣より小倉市北側市街地風景

少しだけ昔の京町銀天街

古くは江戸時代までさかのぼる京町銀天街の歴史。

明治、大正、昭和初期と、古い時代の記録は文書などにある程度残っているが、意外と記録に残らないのが戦後から現在までの、比較的近い時代の出来事だ。この「地球儀」で描ききれなかった少し昔の京町銀天街を、ここで少し振り返ってみよう。

京町銀天街にかかる店舗の看板には、今は無きお店もちらほら。その中の一つ、進駐軍が滞在していた時代の名残だろうか、「Free of Tax」と書かれているのが「高橋無線」。ラジオ・パーツを扱う店として創業し、その後北九州で唯一のパナソニック/ソニーの直売店に。テレビが三種の神器だった時代には、店頭のテレビに道行く人がしばしば足を止めた。ウォークマンのヒットは今も記憶に残る。隣はふとんの大長。向かいの今村歯科が燃えた夜、店の前にいすを出し、「ここで死ぬ」と座り込んだのは「大長」のおばあちゃんだった。その隣の「ヒゴヤ」は文具や雑貨を扱っていたが、なぜか奥が食堂になっていた。

現在の京町銀天街は三つの組に分かれているが、「高橋無線」があった二組には飲食店が多く、鍋焼きうどんが人気の和風喫茶「若竹」、釜飯が有名な「マヤ」、ぜんざいの「森下」など、今もしばしば話題に上る店があった。「マヤ」の一階と二階を繋ぐスロープは近所の子どもたちの絶好の遊び場。一方壁にはシャガールの絵がかかり、小倉の画家や文学関係者など文化人が集う場にもなっていた。

昭和30～40年代には、他にも文化人のたまり場の喫茶店やバーがあった。紫川に近い一組にあったのは「あるじゃん」。現在の「二丁目の元気」の脇、今では歩道になっている場所にあった小さなバーだ。火野葦平や劉寒吉も足を運んだという。川の向こうには進駐軍がいて、外国人向けの土産物を扱うお店もあった。一組に数軒あった「京町ビンゴ」は、数字がかかれたもののようなものにボールをあてて遊ぶもので、客は女性が多く、景品はお菓子だった。近所の子どもたちは、こっそり忍び込んで床に落ちたボールを集めてまわった。

当時は店の二階に住んでいる家族が多く、銀天街にも沢山の子どもがいた。数人集まると三角ベース、人数が増えたと勝山公園などに出かけ野球、というのが男の子たちの定番だった。

ちゅうぎん通りを渡った三組の角にある「黒木屋」は、映画の前売り券も販売していた。封切り後にも前売り券を買えたので、映画を観に行く前に必ず立ち寄っていたという人も。昔からパチンコ屋が多い場所でもあった。パチンコや銀行など大きな区画は、なかなか小売店への転用が難しい。そのため同業種の店舗やホテルなどになることが多い。今の京町にもそんな時代の流れを少し見ることができる。「スーパードホテル」横、現在マンションが立っている場所には、以前ディスコ「サウザントクイーン」があった。エスカレーターで上がった所が入り口。昼の部と夜の部があつて、昼の部には高校生も多かった。かつて銀行があつた場所には一時「うしうし館」というステーキ店があつて、当時の子どもたちにとつて憧れの場所だった。

古くは参勤交代の往還路として、その後小倉のメインストリートとして、人々の生活の中心にあつた京町。魅力的な店があり、個性を持った人々があつまり文化をつくる。長い時間の中で培われた、そんな土壌が今の京町を支えているのかもしれない。

はきもののカクシン

肅々と、鼻緒を挿けて50年。

「下駄屋のおやじ」が迎えてくれる
老舗履物屋。

子どもの頃のことと記憶に残っているのは、なんともいっても1950(昭和25)年12月25日の火事のことだ。「京町の大火」と呼ばれたこの火事は、京町銀天街の入り口に位置するはきもののカクシンの周り一帯を焼きつくした。カクシンの二代目・岡本勝さんは当時5歳。店は奇跡的に被害を受けなかったが、逃げる際、枕元に置いてあったクリスマスケーキを踏み潰してしまったことが今も心残りだ。

そんな岡本さんの父親が興した履物屋「カクシン」は1932(昭和7)年創業。様々な下駄や草履が並ぶ店内の一角に、岡本さんの作業場がある。手作りの作業台に年期の入った昔ながらの道具類。ここで日々、肅々と鼻緒を挿ける。

アイデアマンで、広告一つとっても、常に一風変わったものを試行錯誤していた先代は、岡本さんが小学6年生の時に他界。大学卒業後、一度は市役所に勤めた岡本さんだが、父親が遺した店を継ぐ事を選ぶ。20代の頃は店を軌道に乗せるため、それまで無かった顧客名簿を作り、メーカーの社員とひたすら飲んで情報収集をし

た。やがて1979年(昭和54)年、黒崎に百貨店そこうがオープンすると、知り合いづてに出店のチャンスを得る。強豪ひしめく履物コーナーで、一番の売り上げを達成したことも。小倉そこうにも出店が決まるが、そこう本体が2000(平成12)年に経営破綻。店の経営への影響をなんとか耐え、ようやく京町に落ち着ける…と思ったのもつかの間、地元小売店の協同組合である「協同組合連合会 日本専門店会連盟」の理事長に就任し、2014(平成26)年に勇退するまで、忙しく全国を飛び回った。

昔は下駄も草履も台のサイズは一種類で、鼻緒の挿げ方一つで足に合うよう調整したものだ。最近ではデザインもサイズも多様になったが、客の足に合わせた仕事のできる職人は減ってしまった。見た目だけが良い商品も増えたが、どんな下駄・草履でも、修理を頼まれば快く請け負う。「おばあちゃんの古い下駄が出てきたから、修理してもう一度履けるようにしたい」といった依頼が何より嬉しい。履物の小売店だけではなく、メーカー自体が減りつつある今。着物下駄や草履を履く習慣は残っても、それを支えた職人の世界はいずれ失われてしまうかもしれない。だからこそ、残せるものは残したいと願う。

その思いは、商売だけではなく、生まれ育った街へも向けられる。「町や道の名前一つにも歴史があり、意味がある」そんな思いで、目の前に架かる常盤橋の改名に反対し、かつて森鷗外が小説に記した広告塔の復元

や、今では無くなってしまった大坂町という地名を残す石碑の設置や「清張通り」の命名などに力を注ぐ。

様々な肩書きを持った岡本さんだが、ベースにあるのは「下駄屋のおやじ」としてのアイデンティティだ。人生に大きなドラマも、華々しさも求めない。生きていけば時折スポットライトが当たることもあるが、のぼせ上ったりはしない。むしろ、そういったものはどこか胡散臭いと思っている。もう一つ、「在庫をもたない奴は信用しない」とも思っている。商売人はお金を出して「もの」を買い、それを使って商売をする。まず自分の身銭を切ってから試行錯誤するものだ。実体のない理想や資本を使って儲けるようなことはどうも性に合わない。人生も商売も、アンチ・クライマックスがいい。京町の下駄屋のおやじはそうやって、生まれ育った街で、日々淡々と、自然体で生きて行く。



はきもののカクシン

営業時間:11:00~18:00 定休日:年末年始
北九州市小倉北区京町1丁目-2-6 TEL 093-521-3309

北九州文学サロン

京町に生まれた、
新たな文化拠点。

北九州、小倉という「工業都市」のイメージが強いかもしれない。しかし昔から交通の要所として人々が行き交い、近代化の過程で多くの人々が流入してきたこの街には、人々と共に培われた様々な文化の地層が確実に残っている。名前を知られた小説家、俳人、映画監督や役者以外にも、八幡製鐵所といった企業に勤める人々を中心に発行された職場雑誌も数多く存在する。北九州市立文学館名誉館長も務めた佐木隆三も、八幡製鐵勤務時代に同人誌「日曜作家」などを立ち上げ、創作の腕を磨いた。

京町銀天街から現在の小倉駅に向かっていく途中には、明治の文豪・森鷗外や俳人・杉田久女の旧居があったという。森鷗外がしばしば文学談義を交わしたという西洋料理店「三樹亭」も京町筋にあった。この場所は後に「カフェ・ライオン」となり、松本清張が芥川賞を受賞した際の祝賀会の会場になる。昭和12年、小倉にできた朝日新聞社に勤めていた松本清張。「湖月堂」の栗まんじゅうが好きだったというから、在職中は、饅頭片手に京町を行き来していたかもしれない。

平成29年3月25日にオープンした「北九州文学サロン」は、そんな「文学の街」北九州を発信する京町銀天街の新たな「文化拠点」だ。入り口を入るとまず目に飛び込んでくるのが、壁を埋める大きな陶板壁画。「かがやく太陽、燃える鐵（てつ）、うたわれら」と題された、文学サロンの顔ともいえるこの作品は、北九州市出身の画家で市が発行する情報誌「雲のうえ」の編集委員も務める牧野伊三夫によるもので、陶板制作は市内に本社を置くTOTOが担った。その向かいには地域の文化情報を発信する情報カウンター。そして展示コーナーにはゆかりの文学者の写真や資料が並ぶ。オープンで、文学談話や同好会による句会など、市民の文化活動をサポートする場となっている。

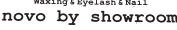
今でこそ少なくなったが、数十年前までは、小倉の街のあちこちに、文化や美術の拠点ともいえる喫茶店やバーがあった。京町銀天街のバー「あるじゃん」や喫茶「マヤ」も文化人に長く親しまれた場所だった。今は失われてしまったこれらに代わり、北九州文学サロンが、まさに文化のタネを蒔く場として、人々が集う場として育っていくことを願ってやまない。

イベント情報などは文学サロンFacebook参照。
<https://www.facebook.com/BungakuSalon/>



北九州文学サロン

営業時間：11:00～18:00(木曜日のみ 21時まで) 定休日：年末年始
北九州市小倉北区京町1丁目5-9 TEL 093-383-8610

 美容室 ラガッツァ OPEN 10:00～20:00 (金は21:00まで、日・祝は19:00まで) 定休日 月・第1・3日 住所 京町1-5-14 電話 0120-417-225	 プラスワン 北九州店 OPEN 10:00～18:00 定休日 日・祝日・土は不定休 住所 京町1-6-2 電話 093-383-7122	 中村パーキングプラザ OPEN 9:00～20:00 定休日 元旦 住所 京町1-5-23 電話 093-551-7022	 八洲 OPEN 17:00～24:00 定休日 年中無休 住所 京町2-1-22 電話 093-531-4878	 魚マルシェ2号店 OPEN 11:00～15:00 17:00～22:00 定休日 不定休 住所 京町1-2-9 電話 093-513-4424	 GALVA OPEN 平 日 12:00～19:00 土日祝 11:00～20:00 定休日 不定休 住所 京町2-1-22 電話 093-482-3318	 エル・バリオ OPEN 19:00～3:00 定休日 なし 住所 魚町1-2-11-2F 電話 093-551-5524	 アイル・イン小倉 アイルイン小倉 OPEN 定休日 年中無休 住所 京町1-6-31 電話 093-521-8884
 連獅子 OPEN 完全予約制 最終受付14:00 時間外の場合はご相談ください 定休日 月、第3火曜日 住所 京町1-5-10-203 電話 093-531-5941	 Bon Male hair OPEN 10:00～20:00 定休日 月、第1火・第3日 住所 京町1-2-3 電話 093-521-0505	 novo by showroom OPEN 9:00～20:00 定休日 日 その他不定休あり 住所 京町1-5-9-3F 電話 080-2733-8540	 元祖 京屋 OPEN 10:00～15:00 17:00～22:00 定休日 火 住所 京町1-2-10 電話 070-2377-0789	 サルタヒコ noodlexcafe サルタヒコ OPEN 11:00～21:00 定休日 月(月休日の場合、月営業 火定休日) 住所 京町1-5-9-2F 電話 093-967-7807	 業務スーパー OPEN 9:00～21:00 定休日 年中無休 住所 魚町1-2-10 電話 093-512-6639	 オガフ時計店 OPEN 10:00～19:00 定休日 第1・3水 第4日 住所 京町1-6-28 電話 093-521-3663	 アサヒ パチンコ&スロット アサヒ駅前店 OPEN 10:00～22:55 定休日 月2回(不定休) 住所 京町2-1-19 電話 093-513-7777
 和酒処Hirai OPEN 月～土 16:00～22:00 (LO21:30) 日・祝祭日13:00～20:00 (LO19:30) 定休日 不定休 住所 京町1-6-36 電話 093-533-0234	 宮崎歯科 OPEN 9:00～19:00 (水は18:00まで、土は13:00まで) 定休日 日・祝 住所 京町1-2-3 電話 093-521-5679	 BAGZY バグジー 小倉店 OPEN 10:00～19:00 (水・日は18:00まで) 定休日 月 住所 京町1-6-30 電話 093-521-8941	 辻利茶舗 京町本店 OPEN 10:00～20:00 定休日 元旦 住所 魚町1-2-11 電話 093-521-1215	 ギャラリー&工房 自由空間 OPEN 13:00～18:00 定休日 日 住所 京町1-5-10 電話 093-541-3288	 ヘアーメイク・グレマ OPEN 10:00～19:00 定休日 月・第1火・第3日 住所 京町2-1-23-2F 電話 093-551-9018	 快活クラブ OPEN 定休日 年中無休 住所 京町2-1-21 電話 093-512-9488	 あや鶏 全席完全個室 九州地鶏居酒屋 あや鶏 小倉京町店 OPEN 17:00～24:00 定休日 年中無休 住所 京町2-1-22-2F 電話 093-533-3222
 和楽 京町店 OPEN 17:00～24:00 定休日 不定休 住所 京町1-6-30-2F 電話 093-531-1844	 活魚居酒屋 味楽本店 OPEN 17:00～24:00 定休日 不定休 住所 京町1-6-28 電話 093-531-6504	 Clothing & Antiques FUN OPEN 11:30～20:00 定休日 年中無休 住所 京町1-6-1 電話 093-953-7994	 TERRACE OPEN 10:00～20:00(火～木) 10:00～21:00(金・土) 10:00～19:30(日・祝) 定休日 月 住所 京町1-6-28 電話 093-512-4560	 スーパーチケット OPEN 10:00～19:00 定休日 年中無休 住所 魚町1-2-14 電話 093-512-1618	 黒木商店 OPEN 11:00～19:00 定休日 毎月 住所 魚町1-2-6 電話 093-551-1738	 はきもののカクシン OPEN 11:00～18:00 定休日 年中無休 住所 京町1-2-6 電話 093-521-3309	 出雲そば 京町店 OPEN 11:00～22:00 定休日 元旦のみ 住所 京町2-1-15 電話 093-551-7404
京町銀天街HP  店舗情報や イベント情報は こちらから。 	 別館海鮮 味楽 OPEN 16:00～23:00 定休日 不定休 住所 京町1-2-10 電話 093-953-6221	 天ぷら定食ふじしま OPEN 10:00～19:30 (LO19:15) 定休日 木 住所 京町2-1-15三徳ビルBF 電話 093-531-5695	 東邦クリニック OPEN 8:00～13:00 15:00～17:00 定休日 水・日・祝 住所 京町1-5-11 電話 093-512-6601	 スーパーホテル OPEN 定休日 年中無休 住所 京町1-6-34 電話 093-541-9000	 レディースファッション クロネコ ソニア・ジグ店 OPEN 10:30～18:30 定休日 年末年始 住所 京町1-2-11 電話 093-521-3469	 Cafe de Fan Fan OPEN 8:00～20:00 定休日 年中無休 住所 京町1-2-8 電話 093-551-4817	 一丁目の元気 OPEN 11:00～17:00 定休日 日・月 住所 京町1-6-1 電話 093-383-6061
	 アウトレットショップ MILL OPEN 10:30～18:30 定休日 年末年始 住所 京町1-5-10 電話 093-513-0590	 フタバ薬局 京町店 OPEN 8:00～18:00 定休日 水・日・祝 住所 京町1-5-10 電話 093-541-0750	 東邦鍼灸院 OPEN 8:00～17:00 定休日 水・日・祝 住所 京町1-5-12 電話 093-521-0722	 創伸接骨院 小倉院 OPEN 9:00～19:30 (木は13:00まで・土は17:00まで) 定休日 日・祝 住所 京町1-2-11 電話 093-513-2113	 カレーハウス CoCo壱番屋 小倉京町店 OPEN 11:00～24:00 定休日 年中無休 住所 京町2-1-24 電話 093-533-5040	 KAREN OPEN 10:00～20:00 (日・祝は18:00まで) 定休日 火・年末年始 住所 京町1-5-10-2F 電話 093-541-5890	 今村歯科医院 OPEN 9:00～19:00 (水・土は13:00まで) 定休日 日・祝 住所 京町1-6-29 電話 093-521-5666

本冊子作成にあたり、以下の文献を参考にさせていただきました。

- 今村元市編(1979年)『ふるさとの想い出写真集 明治大正昭和 小倉』 ●北九州市協会(1983年)『記念写真集 北九州市20年のあゆみ』
- 北九州市史編さん委員会(1983～1996年)『北九州市史(全11巻)』 ●北九州市住まい・生活展実行委員会(1993年)『北九州思い出写真館-街と人を映す時代の万華鏡-』
- 小倉郷土会編(1985年)『小倉郷土史学(全6巻)』 ●佐藤嘉尚編(2008年)『あこのころの北九州市』 ●出口隆監修(2001年)『目で見る 北九州の100年』



地球儀

発行	京町銀天街協同組合
編集	岩本史緒
発行日	京町銀天街協同組合 2021年2月1日

宇佐屋

宇佐屋

OPEN 11:00～20:00

定休日 年中無休

住所 魚町1-2-12

電話 093-521-0075